



‘14年には、赤崎勇、天野浩、中村修二さんが青色LEDで、’15年には、大村智さんが感染症治療法で、梶田隆章さんがニュートリノ振動で、’16年には、大隅吉典さんがオートファジーでノーベル賞を受賞されました。3年連続で大変おめでたい話であり、何回も取り上げさせていただきました。日本社会もマスコミも祝賀ムード全開でしたが、天邪鬼が顔を出し、喜んでばかりでは将来が明るくないと警鐘を鳴らしました。

日本・日本人はすごいのか

受賞の皆様がすごいことに異論はありませんが、それだから日本・日本人がすごいというのには飛躍があるでしょう。

もらえたらすごいけれど、もしもらえなくてもその発明・発見の価値が変わるわけではないですね！科学技術の評価は門外漢には難しいですが、権威に頼る姿勢を改めることも大事なことでしょう。

16年までの国別の受賞者数はアメリカ352を筆頭に、イギリス119、ドイツ82などに続き、日本は25（米国籍の南部、中村氏を含めると27）と第6位です。ただ21世紀以降の自然科学部門に限れば、アメリカに次いで2位です。総合的には残念ながら多いとはいええないでしょう。

ちなみにユダヤ人は民族として20%超（日本人は3%弱）の受賞者を誇り、ボストンのハーバード・MIT両大のみで100名を超えています。

セレンディピティ

セレンディピティとは偶然の幸運に出会うこと、またその能力との意味ですが、ノーベル賞はセレンディピティの物語の宝庫でもあります。

キューリー夫人のX線に始まり、日本人でも白川秀樹、小柴昌俊、田中耕一、下村脩、大村智、梶田隆章、大隅良典さんなど多くの人々がセレンディピティに恵まれ受賞されています。

もちろんセレンディピティを活かす能力や努力など準備あつての荣誉なのです。

科学立国の危機

日本は財政赤字が深刻で、科学技術予算が削減され、国立大学も独立法人化されました。その結果、研究費が減り、研究者の常勤ポストも減り、低給与・不安定なポストを転々とせざるを得ない状況になっています。それで優秀な頭脳が研究者にならない、なってもすぐ結果の出やすい研究に流れ、ノーベル賞クラスの研究が行われないこと、また海外への流出などが危惧されています。

今は過去の遺産で良くても、数十年後にノーベル賞ゼロが続くといった事態が心配されます。

なお、’17年は英国籍ながら長崎出身のカズオ・イシグロさんが文学賞を、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)が平和賞を受賞されましたが、自然科学部門の受賞は残念ながらありませんでした。